

第2回農林系アカデミー・農業大学校運営向上検討会議事要旨【確定稿】

日 時 平成30年9月25日（火）13:00～14:40

場 所 県庁4階 特別会議室

1 河合副知事あいさつ

- ・前回3つの学校について、もう少し連携してやっていけないのではないかという意見があり、本日は皆様の意見を参考に、3つの学校がどのような連携ができるのか、あるいは、3つの学校がそれぞれどのようなことをやっていけないのか、そのあたりについて整理させていただいた。
- ・それについて本日皆様からご意見いただき、今後整理させていただこうと思っている。
- ・本日は忌憚のないご意見をお願いしたい。

○座長

- ・前回第1回には、皆様から大変貴重な意見をいただいたところだが、3校がそれぞれご意見を真摯に受け止め、考え方を整理させていただいているので、その3校の方向性について様々なご意見をいただきたい。
- ・まずは、対応案が検討されているので、連携した取組みについて事務局から説明いただいた後、それぞれ個別の検討案について各学校から説明いただき、その後、委員の方にご意見をいただきたい。

2 取組み紹介

- ・「3つの学校の連携した取組み」について、熊崎農政部長から説明し、それぞれの学校の取組み案について、森林文化アカデミー、国際園芸アカデミー、農業大学校の順で説明。

3 意見交換

○座長

- ・第1回の委員の意見を反映した各学校からの報告を頂戴したわけだが、これについてご意見を自由闊達にいただきたい。
- ・御存じのように、この農林系の3校は、一方では、いかに効果的な経営を行うのかという課題と同時に、もう一方では県土管理を担う立場から極めて重要な役割を果たしていることがある。条件が適合している地域では大規模化の方向に動いていき、条件不利地では、高付加価値を生む対応を求められるような状況があるのではないかとと思う。
- ・3校が、それぞれの専門技術を交換し合いながら、成果を人材として出していくことが極めて重要と考えるので、このあたりについてもご意見をいただきたい。

○G委員

- ・私は以前、農業高校の校長をしていたが、以前は、可見市に農業技術教育センター（後のグリーンテクノ研修センター）というところがあり、高校の先生をはじめ、小・中、幼稚園の先生の初任者研修を行っていた。
- ・農業の高校以外に、普通高校の先生方が農業大学校や園芸アカデミーや森林文化アカデミーで研修できるような環境があったら良いと思う。
- ・3年生の担任や進路指導する先生が、農業専門の先生とは限らないので、いろいろな一般の先生に知っていただくことが大事だと思う。
- ・そこで学んだ先生たちが、進路指導で子供たちや保護者に話をしていくので、先生たちの中で農業や林業のファンを増やしていくことは意義が大きいと思うので、検討してもらえたらと思う。

○森林文化アカデミー副学長

- ・今の意見について、森林文化アカデミーでは過去に郡上高校や斐太高校に新任の先生が就くときに、教育委員会と連携して研修をやっていた。
- ・特別支援学校の先生や12年目の先生がお越しになることもあって、どのようなレベルの先生が来るかはわからないが、教育委員会と連携をとり、教員研修は毎年受けさせてもらっている。
- ・ただし、農業高校の先生などにピンポイントで専門的なことを教えるという話は大変参考になった。

○F委員

- ・県が特別支援学校の高等部専門校を創設する際に、園芸専門の教育のできる人材育成のためということで、全く園芸の素養のない先生に教えたことがある。3カ月間という期間だが、特別な事を教えるわけではなく、普通に授業を受けてもらうだけだが、2年間で2人の先生に来ていただいた。そういう事は、国際園芸アカデミーでもできるのではないかと思う。

○座長

- ・普通高校の先生の初任研修、又はCPD、いわゆる継続的な教育システムとして、そういうものを3校で引き受けていく。そのことがある種、県土に対する認識や、基盤となる農林水産業に対する教養と理解を高めることに繋がるということは、課題として受け止めていくとともに、極めて重要なことだと思うので、そういう方向で考えていきたいと思う。

○M委員

- ・普通高校の先生を対象にという話があったが、県土保全や働き方の多様性だったりとか、こういった職業に関わることが、起業への道に近かったりすると考えると、できるだけ早い段階で、子供たちに伝える機会をしっかりと持ったほうが良いのではないのか。小学校や中学校の授業という形で時間を取るようなことが出来れば、教員も学習するだろうし、良いのではないのか。

○座長

- ・30年くらい前に、ジョージア州や、テネシー州は後進的な地域だと言われていたが、実はこのあたりがアメリカを支えている。フォックスファイア（狐火）という教育運動を始めて、地域を良く知ることが実は重要なことだということで、非常に大きな環境教育などにつながって行って、世界的に着目されたというエピソードを思い出した。

○座長

- ・先ほど、農業大学校のほうから、農福連携という話があったが、この件に関して、統計的な話で恐縮であるが、現在引きこもりの児童というのは、300人～400人に1人の割合と言われている。特にデジタル系の企業では、診療内科的気質障害、いわゆるストレスで生産性が非常に落ちている。これをどうするかというのは、企業にとって非常に大事なことで、園芸分野でも「園芸療法」や「箱庭療法」といった新たな治療方法があり、とにかくデジタルでストレスを抱えた人たちが、超リアリティのあるアナログの世界、生命の世界に身を浸すだけで気質障害が改善するということがあるし、それから、元気な高齢者の方を育てるといった意味でも農福連携は可能性があると思う。
 - ・単なる生産性の向上とか、収穫高の向上とか、そういう事だけではなく、県土保全を含めて、県を担っていく方々が、誰もが取り残されない、そうした未来を作っていくという取り組みからすれば、岐阜なりの新しい観点で農福連携が進んでいくことでも、3校が役に立つ側面はある気がする。

○N委員

- ・園芸アカデミーでは、カリキュラムの中でも園芸福祉に関することを盛り込んでいる。最終的には園芸福祉士の初級の資格を取っている学生もいる。フィールドの中にも園芸福祉のコーナーがあり、新たに花フェスタ記念公園にもフィールドが一部でき、現在岐阜県の園芸福祉協会とタイアップしながら活動している。
 - ・現在の一年生からも、園芸福祉に非常に興味があるという声を聴いている。教員も多治見の病院の方に毎月出かけて、園芸療法を含めた活動を行っている。これからは、福祉との連携は大きな視点として必要だと認識している。

○森林文化アカデミー副学長

- ・木育と言うと、普通は木のおもちゃだけという印象だが、林政部としては、森林から木材となるところまで一貫して木育を行っている。
- ・森林環境と触れ合う中で福祉的効果が生まれるという、ドイツやデンマークの事例があり、そういった子供たちの触れ合う場としての森林をどのように管理していくのか、そういったところにどうやって来ていただくのかを含めて、新しく「森林総合教育センター（仮称）」を作って、広く県民の方に利用していただくという方向で検討している。

○I 委員

- ・前回は提案したが、今通信制の高校が増えてきており、自由に登校できる高校が駅前を中心に非常に増えてきている。子供たちも非常に生き生きと登校している。そういった学校の子供たちは、人間関係でそのような高校に編入したりすることが多いので、そういう子供たちの、次の社会的な場所というところで、この3校が存在するというのは、PRのやり方としてあるのかと思う。
- ・教育の場というところで言うと、小中には仕事を学ぶという授業があるが、出前授業をしていただかなくてはならないので、各学校の先生たちに時間的に余力があるのかということもある。
- ・自分の娘を育ててきた経験から、高校1年生から各大学が学校に来て、子供たちにどのような学校かPRしている。実は進路を決めるのは、子供たちが選んで、それを受けて親が調べていくという形になっているので、そういった高校での説明というのは、子供たちにとっては、たくさん大学のなかから選ぶという大切な場になってくるので、普通校も含めて足を運んでいただけたらと思う。
- ・今回、県の教育委員会は来ていないので、どのような連携がとれるかはわからないし、移住定住も大切なことになってくるので、県の移住定住の部署など、ここにはない部署とも連携を深めていっていただけたら嬉しいと思う。

○森林文化アカデミー副学長

- ・森林文化アカデミーでは、通信制の高校からの生徒がこここのところ毎年1人は入ってくる。最初はその子供たちの事を心配していたが、非常に優秀な子が多くて、入ってみるとすごくいいという子が多い。年齢は1～2つ上だが、ここ5年間くらい毎年受け入れている。
- ・それと、1年生からはやれていないが、高校の2年生の講座をやらせていただいたり、加茂農林高校からはバス2台でお越しいただき、うちの学校の林業や木工の授業を体験していただいております、非常に有効になっている。今後は普通高校の1年生からチャレンジできればと思っている。

○ O委員

- ・農業大学校は、8割が農業高校の出身ですが、県内には農業関係の高校が7校ある。それを含めて本年度は、33校に、うちの職員が、指導教員に直接説明をしている。あるいは、学生にそこに来ていただき、直接説明している。
- ・実際に普通高校から入ってきた子は、スタートラインは農業高校の子との差は大きい、出るころには差は全くない。むしろ乾いたスポンジが水を吸うように、すごく知識力のある子がいる。通信制の子は1人入ってきたが、進路においてどうしても悩むところがあり、どうやって農業の楽しさを分かってもらおうか苦労している。

○座長

- ・先ほど気になったのだが、例えば、教育者としての体系を必ずしも経験してないものが教えているといっても、それはそれで良さがあると思う。教育委員会がここにいないというのも、実はこれらの学校は、自由大学校というところからスタートしていて、文部科学省の統制的な教育とは別の枠で、いわゆる国家から下りてくる教育の体系とは違って、ローカルから立ち上げていく教育という観点から言えば、必ずしも教育委員会にそのまま入っていく必要は逆にはないのではないかと思う。そういう一連の流れの中で、教育とはいったい何だということのを再検証していく価値はありそうだという気がする。
- ・それと、今の福祉の問題についても、おそらくこれを体系的な教育にするのであれば、3校がバラバラに福祉を考えるのではなく、やはり福祉の専門家の方々に、教員に対しての教育をまず通底させるということもあっていいのかと思う。これは1校1校がやるよりも、はるかに合理性がある気がする。
- ・それから先ほどから出ている、先端的技術、特にITやドローンといった技術、測量の技術や、通信が機械と連動していく技術、あるいは、気象観測と温室管理のデータを連動させる技術など、各学校がそれぞれのフィールドでそれをやることについて、同じように、そういうところに精通している人に、3校が共に奨励しながら技術教育をやっていくということで合理性を高めていくなど、お互いに共通して取り組んでいけば、ある程度のことはやれそうだという所が、なんとなく見えてきたのではないか。

○L委員

- ・例えば、工学、医学、地域科学、気象学などのいろいろな事を考えた場合、例えば、ソサエティ5.0で、国が農業で向かおうとしているところがどこなのかという事を考えたときに、一番根本の基礎の基礎を勉強することも非常に重要だとは思いますが、次の何十年先に来ることをどう見ていくかという部分も、先生、学生の両方が学ぶ必要があると思う。そういう観点から、学ぶということがピンとこないようなら、例えば、起業でも良いし、実証実験を実際場でやり、見せて、経験させて、その

上で、もう一度学校に戻して、勉強する。あるいは、データをどう処理したら次へ向かうのかなどを勉強する機会が今後平行的にあると、次に来るべき農業の部分へ1歩2歩先を行けるのではないかと思う。

- ・そういった環境をつくるという事も非常に重要なので、例えば大学のどこの学部と連携するということはあまり考えずに、ゼロベースで考えても良いのではないか。そんな新しい目線で、新しい分野へ、切り込んでいけるような環境が整っているといいなと思う。
- ・例えば、経済学部の学生や工学部の学生がトマト作っても良いと思うし、柳ヶ瀬のビルの中で、最先端のナスができるとか、そういうことがあっても良いのではないかと思うので、非常に間口を広げて考えていくことが重要かと思う。

○座長

- ・柳ヶ瀬の廃墟に近い巨大な繊維倉庫で、新しい施設園芸をやるというのは面白い話。
- ・確かに、日本が目指している新たな方向というのは、政府が明確に示しているわけだから、そういったところに対応していくというのは、すごく大事なところ。

○K委員

- ・森林文化アカデミーはコンソーシアムという取組みをしていて、ロボット技術とか機械メーカーとか、いろいろな企業と一緒にやっている。3校一緒になって作るのが理想かもしれないが、園芸アカデミーや農業大学校については、民間との連携について、まだ充分ではないと思う。最終的に統合するとしても、園芸アカデミー用の企業や関係者が入って、コンソーシアムを先んじて作りながら、花フェスタ記念公園の方に、園芸アカデミーは移転して、何分の1かのフィールドは園芸アカデミーに与えて、一体となった学校を作っていくというのを構想したらどうかと思う。
- ・今、花フェスタ記念公園の戦略も練っているところですが、そのようなことも組み入れていって、戦略を考えたらよいと思う。

○座長

- ・コンソーシアムについて、どのような活動をしているか森林文化アカデミーから説明をお願いします。

○森林文化アカデミー事務局長

- ・コンソーシアムは、平成26年に立ち上がり、現在、産学官で104社が参画いただいていて、林業及び木材産業における現場の課題の解決に向けた取組みを行っている。現在、6つのワーキンググループを立ち上げ、それぞれ山側の方、あるいは川下の製材業、住宅建築の方がリーダーになりながら、例えば山側であったら、獣

害対策として、植えた苗木をシカが食べてしまうのをどうしたら防ぐことができるのかということや、あるいは、日本の気候に合ったチェーンソーパーツを開発して、ドイツから輸入するといった取組みなどを具体的に進めている。

- ・併せて、出口対策として、コンソーシアムの企業の方に学生とマッチングしてもらい、今年は6～7回企業説明会を実施しており、そして企業にインターンシップに行くという流れができており、今年は、もしかしたらエンジニア科の学生が8割くらい、県内の企業に就職するのではないかと期待している。そういった出口対策についても、コンソーシアムの企業にはご協力いただいている。
- ・そういった、産業界のニーズを十分に把握しながら、森林文化アカデミーの教育に生かしている。

○座長

- ・簡単に言うと、森林の世界は、林業の世界と木材業の世界がまったく対話していない。上流、中流、下流が全くバラバラに動いていて、それぞれが問題点を言うだけで、一体化していかないのが現状。これを、一気呵成に対応していこうということで、我々が人材育成していくときに、どんな人材が必要なのかという情報を、まずは我々自身が取らないことには話にならない。学術的なことばかり言っても意味がなく、逆に会員の方たちが、うちが持っている技術を生かして技術開発をしていこうじゃないかという動きも生まれてきている。言わば、民間企業の事業活動のパイを広げていくことにも貢献し、一方では、卒業生を雇用していただくという事に対しても機能している。同時に、技術的な共通の課題を見出すということを目指して作っている。資金的にもメンバー的にも非常に活力ある活動をしていただいております、私どもにとっては非常に利益が大きいことになっている。

○C委員

- ・教員の人材育成ということがあって、相互交流ということですが、やることが、実践とか実務とか、専門性を持った教育であるし、技術とか技能とか、教える場なのだと思う。言ってみれば、3校の先生は県の職員かと思うのですが、実務で幅広く社会でやっている方にもいろいろ教えていただくとか、コンソーシアムというのも、社会人の方だけでなく、園芸・造園の教育の方にも関わってもらって、一緒にやると良いのではないかと。OBやOG、実務家、専門家もセットになって、教育もあるが、実務と結びつくような学校であると良いと思う。
- ・だから、先生の交流もあるけど、そういう先生に刺激を与える周りの先生もいっぱいいて、教育というのが成り立つのではないかと。
- ・それから、私も淡路園芸景観学校を作った時に、周りは公園で、座学とは別に実際の実務をやりながら、その技術を公園の管理に結び付けていく。お客様が来られたら、学生がやっている作業を見ることができて、お客様と学生が会話をするという

のも、教育の一環であり、それが学校だということで作ったつもりだったのですが、実際はなかなかうまくいかない。

- ・だから、思い切って、公園の中に学校があるというのもありかと思う。実は、これの最初の発想がナイアガラの園芸学校ですけれども、良くみてみると、「ナイアガラ公園園芸学校 (NiagaraParks School of Horticulture)」と言っているのですが、公園の中の園芸学校で、その学校は植物園区域の中にある。芝の管理や植物の管理、整枝・剪定や植え替えは学生が授業の一環でやっている。そういう事は、淡路景観園芸学校もやろうとしたけれども、そこでも実現はできていない。これからの園芸学校の在り方として有り得るし、やる意味があると思う。学生たちは、学校で勉強しているというよりも、それが実務に繋がるものであると学ぶことができる。そのまま社会に出ていったら役に立つ技術や技能を身に着け、お客様と対話することも、サービスに関する技術や教育だということであって良いのではないかと思う。

○F 委員

- ・まさに、海外の植物園や公園はそういった形で運営されている。特に、イギリスの王立園芸協会の園芸植物園、それから、世界の名だたるキューガーデンは、中に園芸学校を持っている。彼らが、逆に植物園を動かしている。そういう形になるのが理想的ではないかと思う。

○座長

- ・私もこの夏、キューガーデンに行ってきたのですが、学生と訪問者の対話というのは面白くて、しかもみんな同じコスチューム。ただし、キューガーデンの職員と学生のコスチュームが違う。ただ、来訪者はそんなことはわからないので、一生懸命手入れしている学生にいろいろ聞くのですが、もじもじしながら答えていて、それが逆に触発して、自分の専門性を高めなければいけないということに繋がる。だから、そういうことの仕掛けというのは意味があるのかと思う。

○座長

- ・産業界において、隠れた生産性が向上できない原因として、診療障害になられている社員さんがかなりいるとお伺いするが。
- ・一例を上げると、楽天が 7,500 人のグループ社員を二子玉川に移した。その時に専務が、ここに移って非常によかったのは何かと言えば、心療内科に受診している社員数が、きわめて減った。周りがビルに囲まれているところで仕事しているより、多摩川を見て、たまに富士山が見られるという環境になると、これだけ違うのかと言っていた。どれくらい違うのか聞いたら、35%だと言う。たぶん、企業もストレス障害の方との戦いというのは結構あるのではないかと思うが、そういう所も含めて、先ほどの福祉の話でもあるが、一方でCPDという事があり、技術教育とい

うのは、学校で習って世の中に出て、現場で経験をしながらOJTで技術を習得していくというのは、あたりまえの事なのですが、実はOJTでは習得できない新しい動きというものは、改めて研修をうけないとわからないことが多い。そうすると、熟達者であっても、どこかでもう一回再教育をうけなければならない。それをCPDプログラムと言って、実は今、技術系の全ての団体はこのCPDプログラムに入ることが義務付けられていて、人事評価などにもつながっている。今、あなたがCPDプログラムで持っている点数は何点ですかという問いかけを、今当たり前のように人事は技術系の社員に聞いている。

- ・同じように、社会人になっても、今までのような趣味的な生涯教育だけではなくて、専門性の高い分野で生きている人たちが、自分は継続教育を受けているという事が、全体の水準を上げることにもつながるといふことがあり、生涯教育というジャンルをもう少し広げて考えていくといふことで、3校の存在意義も上がってくる可能性があるのではないかと思う。

○M委員

- ・うちは、会社の中に農林研究所を持っている。まだ、実現はしてないのですが、おっしゃられたような、心的障害になられた人たちが活躍できる場所になれば良いという発想もある。しかし、農業というのは非常に大変で、うまくはなかなかできないので、先の課題ではある。

○L委員

- ・確かに、診療内科という呼び名ができるようになってから、そういった治療を受けて、その結果を上司と相談しながら取り組むといった機会が増えていることは間違いない。それは環境や仕事の問題だけではなく、それだけ複雑化したり、対人的なことが苦手であったり、いろいろなケースがでてきていると思う。最近の教育プログラムの中で、良くなるように取り組んでいるのはどこの企業も同じような状況であると思うが、自然と触れ合うことで、35%も回復することが実証されているのであれば、その通りだとも思う。その中で、今の県内の企業とどういった形でコラボレーションしていけば双方でメリットがあるのかといふと難しい課題だとは思ふ。しかし、環境や置かれている状況で、そういう状況が増えていることは間違いないし、企業がそこに対して時間やお金をかけていることは間違いないこと。

○座長

- ・アメリカでは、今やリゾートよりもリトリートという言葉のほうが流行ってきている。つまり、リトリートメントするとは、一年のうちに何日かそういったチャンスを持つことによって、リゾートでは得られない心の洗い替えができる。
- ・社員が、例えば森林文化アカデミーや園芸アカデミー、農業大学校に1年のうち2

日間でも来ていただくだけで、今までとは全く違った環境に触れ合うことができる。そのことによって、何かに気づいたりすることを、リトリートするという。そういう事で良いと思う。

○L委員

- ・まさに今、各企業で、企業の森をもったりしており、そのような取組みがまさにそういう事だと思うが、どのくらいなら適当なのか。2日でも良いし、今長期休暇も取れるようになってるので、その休暇の過ごし方として、そういったところで過ごせるのであれば、それは随分違いが出ると思う。

○座長

- ・つまり、今企業も農場や森を持っていて、我々の技術が役に立っているかという、たっていないわけであり、それを先ほど言ったようにコンソーシアムみたいなものを作りながら、お互いが利活用し合って、相互に啓発し合うという道筋があっても良いのかなと思う。

○A委員

- ・学校というのは、技術的なことを教えるのは当然のことだが、今の時代どういった時代なのかということ教えることで、夢を与える。だったら、これをやるために、これを勉強しなければならないとなる。
- ・技術的なことは後の話で、夢が無いものにそんなことを教えても、聞く耳が無い。
- ・夢というものがどういうものかと言うと、今は人間関係やいろいろなことで人間が悩んでいる。それを回復するのが、森林であり、植物であるということで、Amazonという企業のアメリカの本社が、700人を収容するようなオフィスを作っている。ドーム型で植物がいっぱい。なぜ作るのかと言うと、どれだけ医者が頑張ってもうつ病が治らないので、植物で癒してやろうというのが今は先端。
- ・そんな話を先生が話したら、生徒はうれしいし、希望が持てる。もう少し夢を与える外部講師などを使って、夢を与えられる学園になるといいなと思う。

○座長

- ・私は先日こんなことを学んだ。
- ・なぜ4つ葉のクローバーを探すのか。3つ葉というのは、愛情と誠実と信義だと。それだけでは人間生きていけないので、4つ目の葉があるものを探したい。それで4つ目は何かと言うと、夢と希望だということです。
- ・夢を学生にどうやって与えるのかというのは、本当に大切なこと。
- ・Amazonの話聞いて、なるほどと思った。

○E委員

- ・学生が、技術を学ぶ以上に学校の魅力をどう得られるかというのは、すごく重要と思うのと同時に、底辺の小学生の教育までを考えた場合に、それを全て教育者がやるのではなく、例えば、そこの学校を盛り上げていく生徒たちが、次の世代の小学生に、学校の魅力をどう説明できるかというところが大切で、それを伝える力ができてくると、すごく学校自体に愛情を持つようになり、生徒たちが学校を作り上げていくのではないかと思う。
- ・今、女性の就農希望者が多く、雇用就農が多くなっている中で、もちろん技術的なプレーヤーであるかもしれないけれど、従業員のリーダーとして、パートさんたちに説明できる人間を育ててほしい。それが雇用する側の期待することでもあるし、何を魅力として、何を伝えていったらよいかという事を考えられる人を育てる教育をしてほしい。

○座長

- ・昔、学生に向かって技術者というのは必ず士というものが付く。ただ、それだけで世の中渡れると思うなど。それにプラスしてもう一つ大切なものは、心だと。士の下に心を書くと志という漢字になる。志が無ければ、士は生きないとよく学生に話しをしたことを思い出した。

○C委員

- ・現在、県と協力して、新規就農の研修を行っているのが成功している。こういった研修という実践的なカリキュラムも学校の中にあっても良いのかと思う。そこに、ICTやIOTといったものをしっかり現場におろすためには、学校で実践がやれることが一番いいのかと思う。
- ・そもそも学生の志が何なのかと思う。就農なのか、雇用なのか、一定期間学校に行っているだけなのか、いろいろあると思うが、今在学されている方の想いは何があるのかと思う。

○座長

- ・なんとなく学校は結婚と似ているなどと思うが、夢やイメージでスタートするわけだが、実際に教育を受けてみると、現場の厳しさに打ちのめされていく。そこからが大事で、そこから夢と希望を与えながらどのように立ち直せるのかという動機付けに教員が一番苦労している。
- ・そうすると、次にそうじゃないということが見えてくる学生たちがいて、そういう学生が伸び代のある学生であって、そこがすごく大事なところ。起き上がりこぶしみたいな力が働くような教育の仕方をどうするべきかということが大切。
- ・農業や花屋さんにはイメージがすごくいいのですが、現実には非常に厳しいということを

踏まえたうえで、自分の存在意味がここにあるということをどう見出し出せるかが勝負だと思う。そこが我々の教育の難しさでもある。

○D委員

- ・今、花育ということに携わらせていただいている。県と一緒に取り組んでいるのだが、今年はフラワーアレンジで担当する学校も50校くらいあり、実際に子供たちに教えた。
- ・まずは種まき体験をするのだが、それを育てて、実際にそれを使って花育ができるのが理想なのだが、違う花を使って、寄せ植えやハンギングバスケットやフラワーアレンジを教えている。
- ・そこは、子供たちに対して、伝えられる場ではあるので、例えばそこでこのような学校があって、このようなことが学べるという資料があれば、配布することは可能かと思った。
- ・あと、子供たちにお花を教えるという体験は、私たち資格を持った者が教えるのだが、小学生の子たちのキラキラした姿は本当に刺激があるので、そこに学生が入ってもらえるのもプログラムとしておもしろいのではと思った。

○H委員

- ・うちの会社は、林業から木材加工まで全てやっていて、森林文化アカデミーには本当にお世話になっている。森林文化アカデミーの学生には何人かうちに就職してもらっているが、この四月にも1人入ってもらった。とてもまじめに一生懸命やってくれている。
- ・今の3つの学校は、自然を相手にする仕事なので、肉体的には非常に厳しい。いくら機械化が進んだと言っても、本当に大変な仕事。これを一生の仕事にしようと思うと、よほどの意志がないとなかなか続かない。うちに来ている子供たちは、本当に山が好きで、自然が好きで、この仕事が好きでやっている子がほとんど。でも、なかなか、この3つの学校を選ぶにあたって、そういうきっかけが掴めていないような気がする。うちの会社は隣に小学校があるので、細々ではあるが、小学校の生活の授業時間に年に1、2回来てもらい、「うちの会社はこんなことやっているよ」という事を見てもらっている。
- ・子供たちはすごく喜んでくれていて、今年の夏休みに初めて木材加工の内装材の端材を利用して、夏休みの課題をこれで作ったらどうですかと、こちらから宣伝し、無料であげたら、10人くらい取りに来てくれた。
- ・山に住む人間が、森林を大切にしないといけないということを思ってもらう事は、やっぱり小学校からかなと思って、うちの会社も少しずつやっている。
- ・やはり現場を知ってもらうことが一番良いと思うので、企業をもっと使ってもらいたいと思う。

○A委員

- ・学校の魅力というのは、生徒が自ら楽しいということを発信しないと魅力を感じない。今は、SNSがあるので、生徒が喜びを自ら発信する。それを学生が見て、あそこに行きたいとなる。そういう事も大切だと思う。

○J委員

- ・やはり一番は、こういう事が好きで、入りたいという学生をいかに集めるか。
- ・自分は商学部卒なんですけど、法学部に入ろうとしたら、法学部は弁護士になるところと言われた。けど、実際は全員弁護士になっているわけではない。私どもの会社にも、法学部の学生も商学部の学生も、医療系の学生も入ってくるが、我々にとってみたら、何故うちの会社にとは思うが、こういうところに魅力があるといって入って来てくれる。
- ・やはり、まずはたくさんの方が学校に魅力を感じて入ってもらうことが大切で、その後のことは農業や林業のところに行かなくても良いと思う。
- ・ドローンとかITとかの農業技術を身に付けて、その後一般企業に入ってもらっても良いと思う。

○座長

- ・今までの議論を取りまとめさせていただきたいと思う。
- ・学生を募集することについて、単に農業高校のみならず、普通学校についてもしっかりPRしてくことが今後は大切。
- ・移住定住と対応するのであれば、県のそういった組織とも向き合って、何が必要なのか、しっかり考えることが大事。併せて、先端技術を含めた将来の方向については、3校でカリキュラムを共有するということが一つの方向でないか。
- ・教員の相互交流というのは重要なのだが、県の職員の相互交流は難しい。これをどうやって乗り越えるのかは県でやっていただき、実のある相互交流の枠組みを作っていく必要がある。教育をするためにここにいるのか、派遣されたからここで派遣された義務を果たしていくのかという微妙なニュアンスをどう乗り越えていくのかは、結構大切なことだと思うので、人事の停滞を起ささないためにも、こういうことをどう考えていくのかというのは一つの大きなハードル。
- ・コンソーシアムという方法があるので、産学が自らお互いの問題点を出し合いながら、協働して、上流から下流まで様々な形で産学交流をしっかりとやりながら、公民連携をその中で果たしていく。入口にも出口にも、そして将来にも貢献できるような学校の在り方と言うのがあるだろうと思う。そのためには何が必要かと言うと、入口の議論として、夢とか希望とか、学生たちが将来に対して展望が持てるような、そういう教育があってしかるべきなのではないか。

- ・現場に出ていくと厳しいので、厳しいことを共有しながら、厳しさを乗り越えていく手立てをどうやって教育の中で位置づけていくのかというのが大切。いずれにせよ、学生にとって、我々の教育機関が魅力的であると映ることが最も大事である。
- ・補足的に言えば、園芸アカデミーだけの話ではあるが、ナイアガラ園芸学校のように、消費者の目の前に学生が立って、消費者の直接の問いかけを受けて、質問を受けることによって自分自身を再教育していく。さらに、出前授業を学生がやることによって、子供たちから質問を受けて、自分の知識の至らなさに気が付いて、もう一回自分の研鑽を図るような、そういう教育機関が持つ一定の介入方式を仕掛けていかないと、教員も学生の質も向上しない。

○部長

- ・それでは、第2回検討会を締めさせていただきます。